

氏名(本籍)	ね ばし しょう いち (長野県) 根 橋 正 一		
学位の種類	博 士 (社会学)		
学位記番号	博 乙 第 1,301 号		
学位授与年月日	平成 9 年 6 月 30 日		
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当		
審査研究科	社会科学研究科		
学位論文題目	上海の開放性と公共性に関する社会学的研究		
主査	筑波大学教授	博士(社会学)	駒 井 洋
副査	筑波大学教授		三 石 善 吉
副査	筑波大学教授		菱 山 謙 二
副査	東京農工大学教授	博士(社会学)	若 林 敬 子

論 文 の 内 容 の 要 旨

本論文は、中国の大都市上海の都市の性格を社会学的に解明することを目的としている。北京と比較しながら、著者は開放性と公共性というふたつの軸からなる分析枠組みを提示する。開放性とは、貿易港であることに由来して社会意識が対外的に開かれていることを意味する。また公共性については、市民社会が公権力に対抗しながらもつ私有圏への公共的関心のありかたであるとするハーバーマスの論議を援用している。上海では中央の皇帝権力に対抗する市民的公共性が発展した。公共性の反対概念は共同性であり、皇帝の私が公として民衆に自己否定あるいは自己犠牲を強いる。北京は開放性にたいする閉鎖性と、公共性に対する共同性という性格を持っており、上海とは対照的な位置にある。

本論文は、問題の設定と調査の概要を提示する第1章、時系列的に上海の発展を分析する第2-6章、結論と展望を述べる「おわりに」から構成されている。

第1章では、まず先行研究の整理をふくむ問題設定がなされ、ついで本論文のデータとなった三種類の実地調査の概要が示され、最後に本論文の構成が述べられる。

「海賊と上海連鎖-上海公共性の萌芽」と題される第2章は、時期的には上海が世界システムに包摂される19世紀後半以前を対象としている。海賊的性格をもつ貿易商である海商の存在が鎖国政策としての海禁を動揺させ開放性の発端となったこと、さらに運輸業、商業と金融業からなる上海連鎖が成立し、その過程で同業団体ないし同郷集団としてのギルドが結成されて公共性の発端となったことが述べられたのち、閉鎖性と共同性をもつ北京の形成過程が検討され、北京に帝都型都市という規定が与えられる。

「買弁的開放都市としての上海の形成」と題される第3章は、時期的に19世紀後半から1911年の辛亥革命までをあつかう。国際経済への統合は貿易関連産業を興起させた。その中で外国商人が登場したが、彼らは中国との接触において買弁に依存せざるをえなかった。また、外国商人は租界を建設した。なお、この時期の上海で買弁に対抗した人々は、ギルドの流れをくむ紳商たちであった。

「民族資本家と職員層-発言する上海的公共性」と題される第4章は、辛亥革命以後1949年の中国革命までの時期について分析している。1919年の五四運動の頃から、上海では民族資本家が台頭し、買弁や紳商にとってかわった。それとともに民族意識を強くもつ職員層が形成され、産業労働者とともに上海的公共性の新しい担い手となった。貿易港としての開放性も増大した。なお当時租界の外に華界が成立し、スラムが発展した。

「自主性を喪失する上海」と題される第5章は中国革命以降文化大革命を経て改革開放路線のはじまる時期までを対象としている。この時期、貿易港としての上海の地位は著しく低落したものの完全に機能を喪失したわけではなく、開放性はかろうじて維持された。しかしながら、中央権力による社会主義的共同性によって、上海的公共性は極端に抑圧された。共同性は、一方では地方建設の支援や上山下郷の政策にしたがう市民の受動的移動としてあらわれた。また他方では、市内や資本家や自営業者の集団化により自主性が喪失され、公共性の基盤が奪われた。ただし、彼らの知識は社会主義にも有用であったため、その地位は温存された。

「改革解放と継承された職員層」と題される第6章は、改革開放路線下の上海の検討にあてられている。まず開放性については、世界経済に再統合された中国経済の窓口としての上海の再発展が、浦東開発を中心に分析されている。また上海的公共性については、社会主義的共同性にもとづく都市計画としての衛星都市構想と単位を通しての管理にたいする市民的抵抗があり、都市の再開発計画と居住地区におけるコミュニティとしての社区建設が余儀なくされたことが述べられる。また辛亥革命以降形成された職員層はこの時期にも継承されているが、海外への流出や経済指向性など公共性と遠いエゴイズムの傾向を強めていることが意識調査に基づいて明らかにされる。

「おわりに」では、職員層のエゴイズムにかわる公共性の再生の可能性が展望される。現在中央では、江沢民など上海の職員層から出自した指導者が台頭している。残存する共同性と現在の上海に支配的な没公共性のもとでは、この人びとが上海的公共性を体現できる可能性は大きくない。それにしても、上海の没公共性の下にはギルドや紳商から民族資本家や職員層に引き継がれてきた公共性の伝統が潜んでいることを忘れてはならない。

審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文が中国の大都市上海について、開放性と公共性という視軸を設定しながら論理的にも実証的にもその社会学的解明に成功していることは高く評価される。これをさらに敷衍すれば、本論のメリットは次のような諸点にある。

- (1)上海についての従来の研究の蓄積を十分に摂取していること、
- (2)歴史的段階区分をしながら、それぞれの時期の特徴を明確化していること、
- (3)『元史』『明史』『清史稿』『上海県史』を代表とする、中国のオリジナルな資料を駆使していること、
- (4)詳細な個人史についての聞き取りを含む大規模な3種の実態調査の結果を効果的に活用していること。

ただし、本論文にはいくつかのデメリットも散見される。

- (1)中国の他の沿岸部の大都市、たとえば香港や広東などとの比較にもとづく上海の位置付けが若干弱い、
- (2)先行研究の中で、特に都市論関係の業績への言及がやや不十分である、
- (3)統計資料の中には古くなったものがみられる、

などがそれであるが、本論文の価値を損なうほどのものではない。

よって、著者は博士（社会学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。